

県営安東地区圃場整備事業地域

# 養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告

——付・竹川遺跡——

1972

三重県教育委員会

## 序

津市安東地区に、遺跡が所在することは古くから知られていたところであ  
りますが、昭和42年に始った県営圃場整備事業により、新しい遺跡が続々と  
発見され、その都度、緊急調査を繰り返してきました。

そこで、県農林水産部と協議をし、事業に伴って削平ないし掘鑿される部  
分について、試掘調査を行い、遺跡の有無を確認することになりました。こ  
こに報告する3遺跡は、それにより確認されたもので、発掘調査は事業にと  
って必要最少限度の、万止むを得ない部分に限って実施致しました。

ここに発掘結果の報告を刊行するに当り、調査に協力いただいた県農林水  
産部及び三重農林建設株式会社の各位、地元河辺町老人会の皆さんに謝意を  
表するものであります。

昭和47年3月

三重県教育委員会  
教育長 関根則之

## 例　　言

1. 本書は、三重県教育委員会が行なった県営安東地区圃場整備事業地域内の養老遺跡・

森山遺跡B区・桐山遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2. 調査は次の体制で行なった。

調査主体　　三重県教育委員会

調査費負担者　三重県農林水産部

調査担当者　　下村登良男（三重県教育委員会文化課）

3. 発掘調査後の遺物整理および報告書作成は下村が行なった。

4. 発掘調査にあたっては、三重農林建設株式会社、県耕地課、津耕地事務所の全面的な協力を得た。

5. P L I の写真は津耕地事務所の提供による。

6. 発掘作業には田村喜代郎氏をはじめ地元津市河辺町の老人会の協力を得た。

7. 付録で報告する竹川遺跡の発掘調査は昭和45年2月に津市教育委員会が行った。

遺物の整理は、三重大学歴史研究会の山田友好（現在株式会社ダイエー勤務）が当り、

報文は山田友好と谷本銳次（三重県教育委員会文化課）が作成した。

8. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。  
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

## 目 次

I	前 言	1
II	位 置	2
III	遺構及び層位	6
IV	遺 物	8
V	結 語	16
(付) 竹川遺跡発掘調査報告		

## 図 版 目 次

PL 1	遺跡遠景
PL 2	桐山遺跡発掘区全景、桐山遺跡発掘区南壁断面図
PL 3	養老遺跡排水溝壁面、発掘前の森山遺跡B区全景
PL 4	発掘後の森山遺跡B区全景、森山遺跡B区東半部
PL 5	養老遺跡出土土器
PL 6	森山遺跡B区出土土器、桐山遺跡出土土器

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	養老遺跡位置図	3
第3図	森山遺跡位置図	4
第4図	桐山遺跡発掘区	5
第5図	森山遺跡B区平面図	7
第6図	桐山遺跡発掘区南壁断面図	8
第7図	養老遺跡出土土器実測図と拓影	9
第8図	森山遺跡B区出土土器実測図	12
第9図	桐山遺跡出土土器実測図	14

# I 前 言

安濃川左岸下流域一帯の穀倉地帯に、農業基盤を整備する目的で県営の安東地区圃場整備事業が開始されたのは、昭和42年であった。事業は、昭和47年度完成目標に、毎年継続して下流域より上流域へと実施されている。当然、今までの耕地が事業計画に従い削平されたり、盛土されたり、あるいは、圃場に整然とした農道及び用排水路が新規に敷設されたりした。また、事業の一環として、津市の東部丘陵の西裾を流れる美濃屋川の河川改修工事も同時に行なわれてきた。事業開始当初、圃場整備予定地内の遺跡の所在については、津市渋見町の竹川遺跡、同市納所町の納所遺跡等の4件が知られていたのみで、それすら、遺跡の規模及び性格に至っては不明であった。

事業開始から3年目の昭和45年1月末、津市渋見町の美濃屋川の改修工事現場で、弥生時代後期の遺物包含層が露呈し、周囲に土器片が散乱している状態を、三重大学歴史研究会の学生が発見し、そのことを津市教育委員会に通報した。しかも、その場所が「全国遺跡地図（三重県）」（文化財保護委員会刊）に記載された竹川遺跡の一劃であることが判明するに及び、県の事業担当部局と教育委員会との横の連絡不十分が指摘され、世論の批判をあびた。とりあえず、工事を一時中止して、残る遺物包含地について、津市教育委員会が主体となり、緊急調査を2月初旬の3日間に実施した。が、所詮は遺物採集にすぎなかった。

45年度は事業が上流域へ延び、津市長岡地内から河辺地内にかけて施工されたが、今度は農道用の盛土を利用するための土取り現場—同時に幹線排水路敷に予定されて削土しなければならない場所—で弥生時代後期のV字状の弧状溝址が、前年度同様、三重大学歴史研究会OBにより発見された。現場は、通称「森山」といって、平地にとり残された標高約15mの丘陵の西端部分で溝址は削土による崖面に表わされていた。そこで、また緊急調査を、県教育委員会が主体となって46年1月16日から8日間実施した。その結果、弥生時代後期土器の一括資料を多量に得た。なお、同年度の事業によって、「森山」周辺の水田下にも遺物包含層が広くひろがっている事実が明かになった。<sup>(1)</sup>

46年度の事業施工地域は、河辺と納所地内で、そこには三重県遺跡台帳に照しても遺跡の所在は確認されていなかった。しかし、事業中に遺跡の発見される可能性も大きく、44・45年度のように、遺跡発見→事業の一時中止→緊急調査という事態の繰り返しをなくすため、事業の直接の担当部局である県農林水産部と協議を重ねた。その結果、事業地内で削土ないし掘鑿される部分については試掘を行い、それにより遺跡が新しく確認された場合は、その取り扱いについて、再度協議することになった。

試掘対象地域は、(A)美濃屋川改修域、(B)河辺地内排水路域、(C)納所地内排水路域、(D)「森山」土取り域の4ヶ所であり、試掘調査は46年11月11日より同月23日まで、つぎのように実施した。(A)では $2\text{m} \times 2\text{m}$ の試掘坑17ヶ所、(B)では $1\text{m} \times 2\text{m}$ の試掘坑35ヶ所、(C)では $1\text{m} \times 2\text{m}$ の試掘坑123ヶ所、(D)では $2\text{m} \times 2\text{m}$ の試掘坑4ヶ所と幅2mの試掘坑延25mをそれぞれ設定し、試掘した。その結果、(A)、(C)、(D)の地域内で遺物を包含する層のあること確認し、遺跡の一部と判断し、農林水産部に報告した。

(A)、(C)、(D)での工事は、圃場整備事業にとって緊急かつ重要なものであったため、(A)で $300\text{m}^2$ 、(C)で $1\text{m} \times 40\text{m}$ 、(D)で $200\text{m}^2$ を調査することになった。(C)の発掘区は、排水路部分のみで、当然遺跡は周辺にひろがっているものと考えられるが、事業による削平はないため、調査の対象よりはずした。

なお、(A)、(C)、(D)の試掘で検出された遺跡は、それぞれの小字名をとって「桐山遺跡」、「養老<sup>(2)</sup>遺跡」、「森山遺跡B区」と名づけることにした。

調査は、県教育委員会が主体となり、46年12月8日より翌年の1月6日まで、養老、桐山、森山B遺跡の順で実施した。しかし、調査初日に養老遺跡へ出かけたときには、調査予定の排水路部分40mは、掘鑿機械で掘り返され、無残にも土器片があたり一面に散乱している状況で、調査が遺物採集となってしまった。工事担当部局と請負業者との連絡不十分からであったが、結果的に養老遺跡においては44・45年度の轍を踏んでしまった。

注(1) 森山東遺跡として埋蔵文化財包蔵地台帳に載せた。

注(2) 前年度発見の地点を森山遺跡A区とし、A・B区併せて森山遺跡とした。

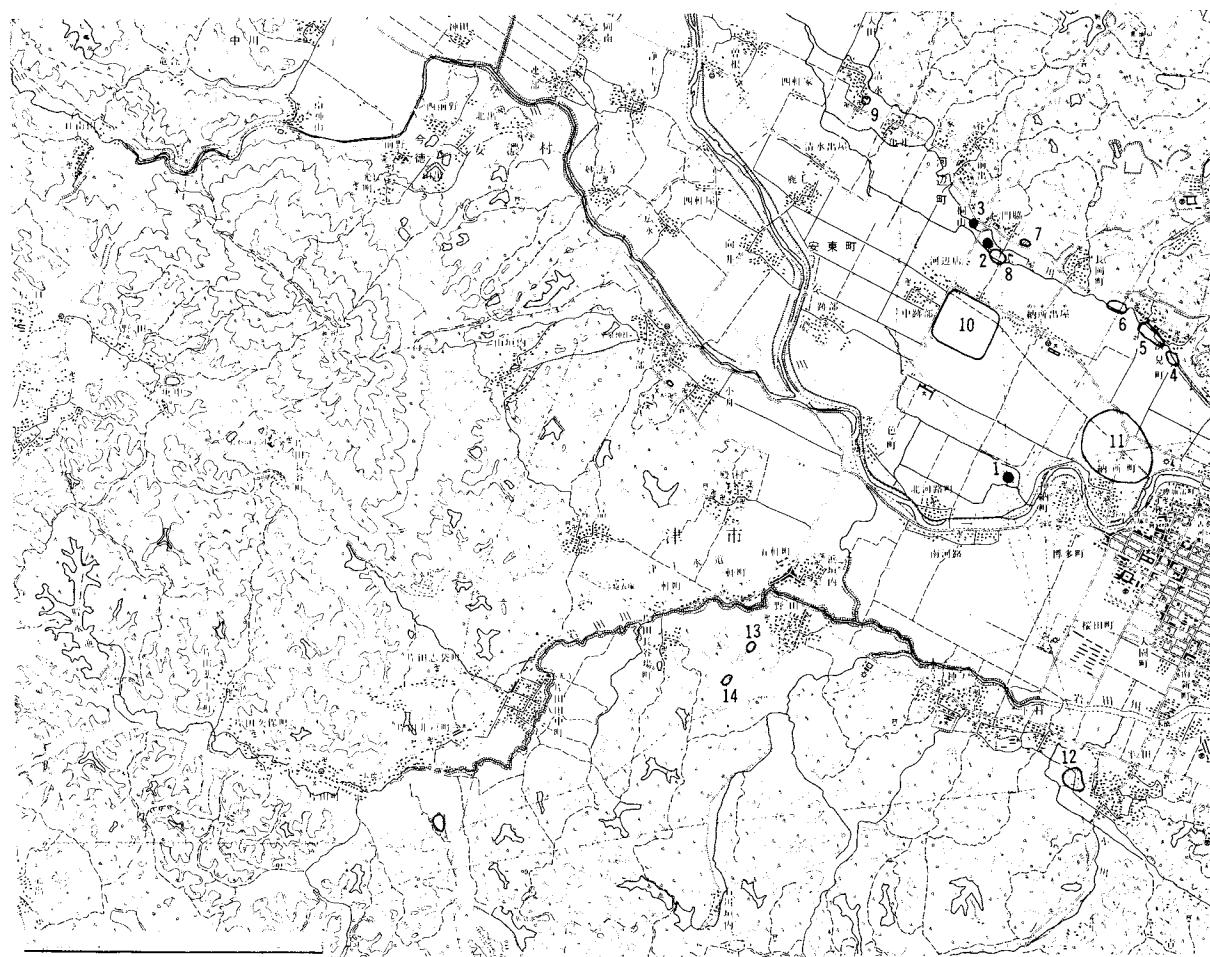
## II 位 置

### 1. 養 老 遺 跡

安濃川は、安芸郡から津市に入ると、流れの方向を南から東にかえ、津市神納及び納所地内で蛇行を繰り返す。神納の集落を内に呑み、北へ張り出して大きく川がうねり出す。その西岸から西へ200mほどのところに遺跡は所在する。行政的には、津市納所町字養老に属する。現況地目は水田で、比較的起伏は少ない。標高6.65~6.75mで氾濫平野の一劃に当る。遺跡地のすぐ東は安濃川に沿って残る自然堤防で、畠地として利用されている。

### 2. 森 山 遺 跡 B 区

安濃川左岸の氾濫平野の中央を県道雲林院一津線が走る。津市河辺店の交差点を北東方向にとれば、浄土真宗高田派本山のある津市一身田町に至る。この道は、氾濫平野を横断しており、美



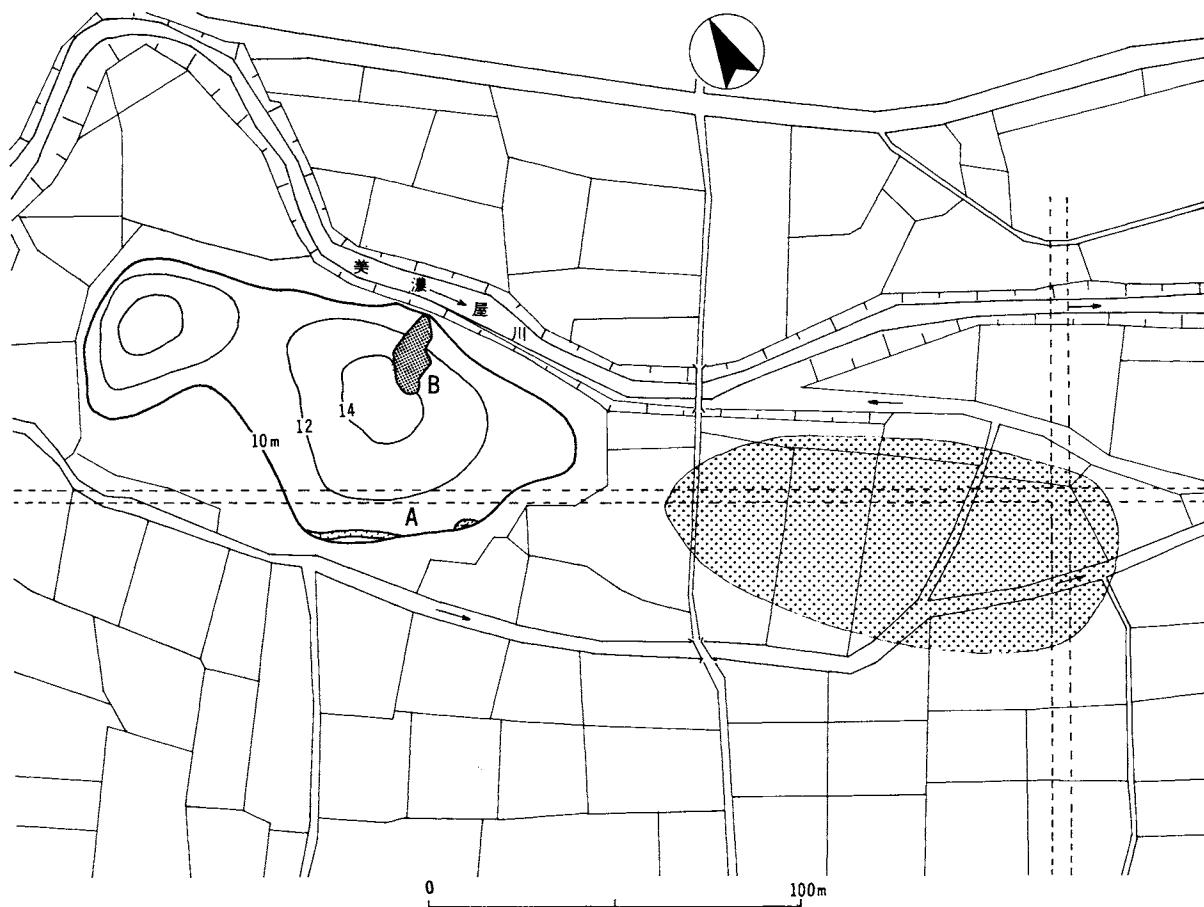
第1図 遺跡位置図（国土地理院1：25000 津西部）

① 養老遺跡 ② 森山遺跡 ③ 桐山遺跡 ④ 竹川遺跡



第2図 養老遺跡位置図（1：3000）鎖線は排水路

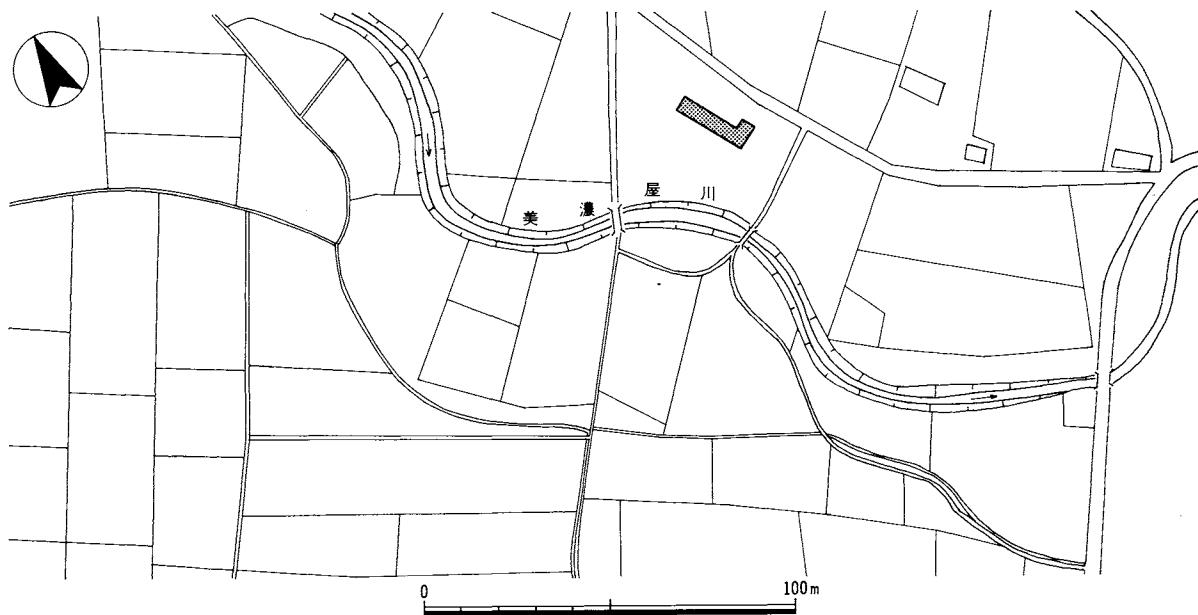
濃屋川を渡ると丘陵地帯に入ってしまう。遺跡は、道が美濃屋川を渡る手前、東側の「森山」という丘陵にある。森山は、第3紀安芸層よりなり、もとは北裾の一部を美濃屋川が洗っていたほかは、水田にまわりを取り囲まれた丘陵であった。北西—東南方向に約140mと長く、中央より西寄りのところでくびれて、相似した小丘が連接する恰好となるが、東の小丘がひとまわり大きい。両丘とも、標高は15m前後で、10mの等高線で崖状となっていたようである。まわりの水田面は標高7.7m～8.7mある。調査時点では、森山周辺の圃場整備は終了し、森山は事業に伴う土取り地にされたため、西の小丘はほとんど削りとられていた。東のも南西側が排水路によって直線的に削りとられて崖面を見せていた。この排水路工事が昭和46年2月に施工された際、東の小丘が南西方向にふくらむ部分で、V字状の弧状溝址が発見され、溝内より多量の弥生時代後期—伊勢湾地方第VI様式<sup>(1)</sup>—土器が、緊急調査の結果出土した。この地点が森山遺跡A区である。B区は小丘の最高所を挟んでA区と反対側の美濃屋川に面するところにある。そこは三角形状の狭い平坦地となり、長辺に当る部分が川に面し、他の2辺にあたるところは急傾斜となり、小丘の高所の部分に続いていた。標高は11m前後で、A区と変わらない。現況は山林であるが、かつては畠として利用されていた。



第3図 森山遺跡位置図 (1:2000) 右側網目は森山東遺跡推定範囲  
鎖線は排水路

### 3. 桐山遺跡

安濃川左岸の氾濫平野を横断して津市一身田町に至る県道を挟んで、森山遺跡とは反対側にあり、直線距離にして180mほどのところで、美濃屋川の左岸にある。ここは、美濃屋川と見当山から派生する丘陵とに挟まれた、幅狭い水田の一劃で、すぐそばを美濃屋川が流れる。標高は8.2mほどである。行政的には津市河辺町字桐山に属する。



第4図 桐山遺跡発掘区（1：2000）

なお、上記3遺跡が発見される以前に津市中央部の安濃川下流域の氾濫平野に5ヶ所ほど遺跡が所在することは、昭和36年までに知られていた。その後、昭和42年に始った県営圃場整備事業の進行に伴って、続々と新しい遺跡が発見されている。津市街地の2ヶ所を除いては、すべて安濃川左岸に集中している。しかもそれは安濃川沿いにあるものと、美濃屋川の小流に沿うものとなり、後者の数がはるかに多い。前者の代表的遺跡は、養老遺跡の東600mにある納所遺跡(1)で弥生時代全時期及び、古墳時代前期の土器を包蔵していることが最近判ってきた。後者の遺跡として、下流から大御堂遺跡、竹川遺跡(4)、市場遺跡(5)、宮代遺跡(6)、コウゼンジ遺跡(7)、森山東遺跡(8)、清水遺跡(9)と続いている。また、森山遺跡より南へ400m、津市河辺店付近にも松ノ木遺跡(10)が所在する。すべて弥生時代後期より古墳時代につながる遺跡のようである。市場・森山・森山東・松ノ木遺跡は圃場整備事業の進行に伴い発見されたもので、今報告の3遺跡も例外ではない。今後、上流へと事業が進行するに従い、安濃川左岸の氾濫平野では多くの遺跡が発見されるに違いない。安濃川右岸流域では、昭和21年に津市古河町中根氏邸内遺跡で多数の弥生式土器を出土したことが知られるのみである。そして右岸流域の丘陵上及び同裾には古くから知られる半田遺跡(12)以外に、最近明らかになった柳谷遺跡(13)、大ヶ瀬遺跡(14)がある。

さらに弥生時代から古墳時代に続く遺跡が点々とある氾濫平野を一望できる恰好の長谷山東面の中腹から山麓にかけては、400基ほどのおびただしい古墳が群集し、そのあり方は注目される。

(1) 以下様式区分はすべて杉原莊介「伊勢湾地方」『弥生土器集成本編2』によった。

### III 遺構及び層位

#### 1. 養老遺跡

排水路部分を調査する予定であったが、連絡の不徹底から、現地へかけつけたときはすで重機によってV字形に排水路は掘られていた。層位は排水路側壁によってある程度確認するにとどまった。耕土層（厚さ20cm）の下に厚さ40~50cmの黄褐色土層が走り、さらにその下に褐色土層があった。基本的にはこの3層で、耕土は無遺物層である。つぎの黄褐色土層は、砂質土を混じる層を中に挟んで3層に分れるようであった。この層から遺物が出ることで一応上層とした。褐色土層は粘着性があり、日に当てるに固くしまる土質をもつ層で、これを下層とした。厚さは70cmほどまでは認められたが、まだ下へ同じ土層が続くようであった。下層からは弥生時代後期の土器及び古墳時代前期土師器とともに出土したが、それに対応して下層を2層に区分する確証は得られなかった。たゞ、壺形土器1は下層でももっとも深い地点で出土したものである。

なお、排水路側壁には遺跡らしいものの断面は見当らなかった。

#### 2. 森山遺跡B区

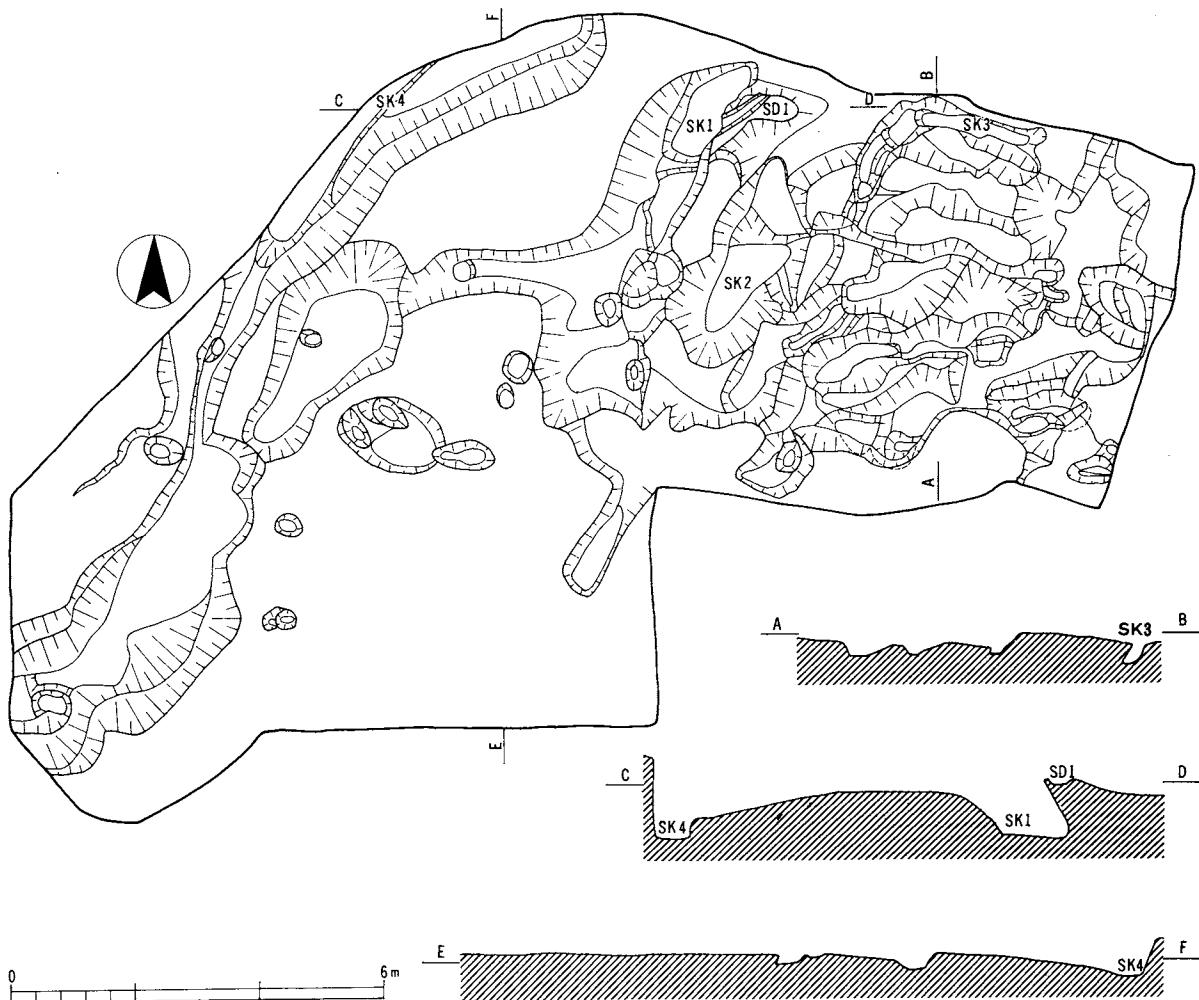
発掘部分は、森山の三角形状の平坦部で面積は150m<sup>2</sup>ほどである。表土層（30~40cm）の下に遺物を含む黒褐色土層があり、その下は地山で、第3紀安芸層からなる。遺構は溝状土塙がほとんどであり、1ヶ所だけ、確実な溝址が検出されたにすぎない。

##### ○土 塙

発掘区の、東に突き出た部分に集中して溝状の土塙が多く、土塙内には黒褐色土がつまる。しかも土塙の中には、一方の壁が下へいくほど地山にくい込み、他方の壁もそれと平行する状態で堀られた土塙としては不自然なものがあった。SK1・SK3がそうである。

SK1 溝状土塙で最大幅0.65m、長さ3mのもの。東側上端面より塙底までの深さ80~90cmで、塙底の高さの違いによって2つの部分に分けられそうである。東壁は下へいくほど地山へもぐりこむ。出土土器には1・6・17がある。

SK2 上端面で最大幅1.6m、長さ3.5m、塙底は最大幅0.4m、長さ0.8mになる。出土土器中の唯一の完形品12はここより出た。



第5図 森山遺跡B区平面図（1：120）

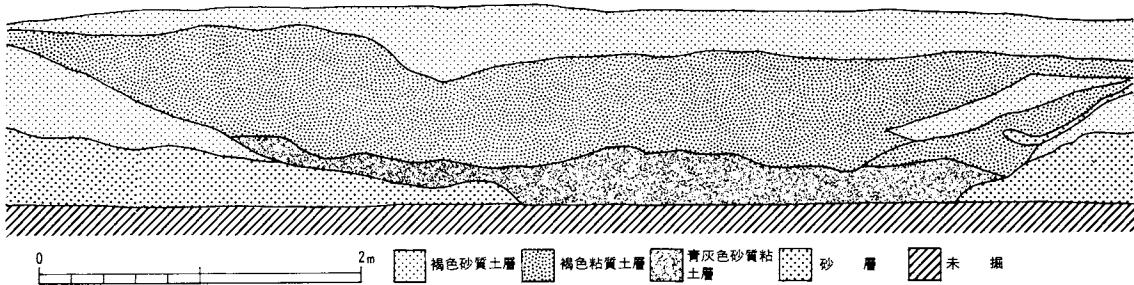
SK3 幅0.25cm、長さ2.1mの細長い溝状のもので、南壁が地山にくいこみ、深くて溝底まで探りえなかった。弥生後期の土器片が多数出土した。

SK4 発掘区の北西壁に沿って検出されたもので、わずかながら弧状になる。一方の壁は明らかにできなかったため、幅は不明であるが長さは6mほどある。上端面より塙底へはゆるやかに傾斜し、その差0.4~0.75mある。北隅より南へいくにしたがって塙底は低くなる。塙底より3・14の土器とともに弥生前期の土器片31が検出された。

#### ○溝 壁

SD1 SK1 東壁上端面にあるもので残存部分の長さ0.9m、幅0.25mをはかる。深さは0.2mほどであり、弥生後期土器片が出土した。

なお、土塙状のものは他に多くあるがSK1・SK3のように一方の壁が地山の下へもぐりこんでいるものは他に3ヶ所ある。



第6図 桐山遺跡発掘区南壁断面図

### 3. 桐山遺跡

L字型に幅4mで総延長23mを発掘した。遺物はL字形の下辺の部分に集中し、他にはほとんど検出されなかった。下辺に当る部分の断面は第6図のとおりである。

耕土下に砂を含む褐色土が20~30cmの深さで堆積し、それより下の層位が複雑になる。下辺に当る南壁断面で見ると、両側より中央部へ砂層が傾斜して堆積し、その上を砂質土層がおおい、ともに遺物を含まない。その間の浅くU字状になった部分に青灰色砂質粘土層と褐色粘質土が堆積している。ともに遺物を包含する層で下層の青灰色砂質粘土層より多く出土した。1~6、25土器は下層のものである。

## IV 遺物

### 1. 養老遺跡

遺物は、2個の土錘をのぞいて、すべてが土器である。土器は、溝掘用の重機によって排水溝の両側に盛られた土塊の中より採集したもので、1~25・33~39は下層、28~32は上層出土のものである。なお、26・27の層位は確かでない。

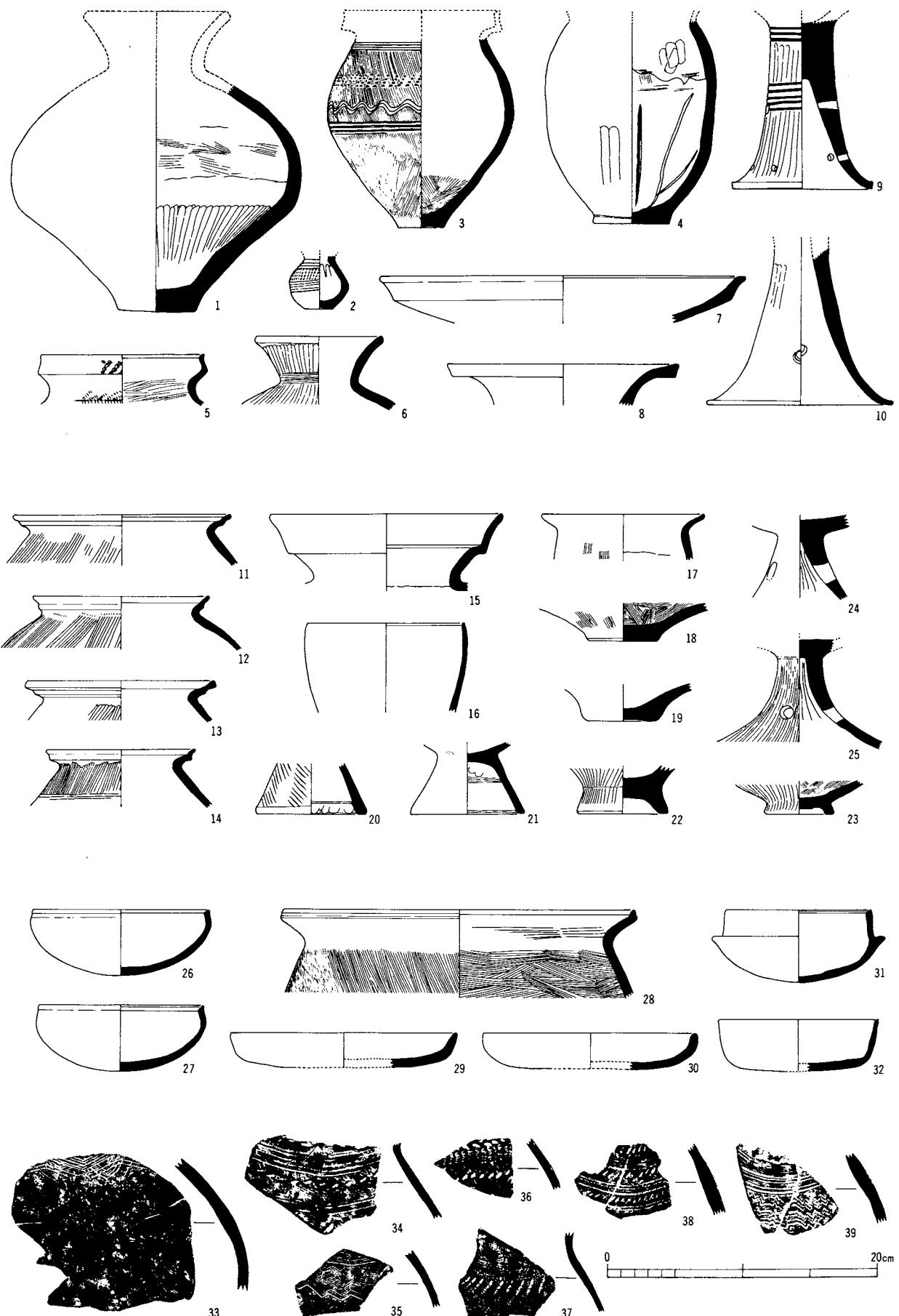
土器には完形品がなく、全形が知れるのがわずかにあるにすぎない。下層出土の土器は、弥生時代後期と古墳時代前期の2時期に属し、上層のものは古墳時代後期以降に属する。

#### (1) 弥生時代後期の土器

伊勢湾地方の第V様式—従来尾張地方で瑞穂式と呼ばれたもの—の特徴をもつものである。

##### 壺形土器(1・2・4・6)

1・2・4はともに口縁部を欠くが1・4はゆるく外反する口縁部をもつと考えられる。1は推定高約20cm余りで、最大径は胴部中央にあり、器高と同じほどである。肩が張り、下部が引き締って、胴部は算盤玉のような形をなし、底は平底である。器表面は、胎土が手につくほどざらつくが、肩に範磨き調整の一部が残る。内面には、 $\frac{1}{3}$ の高さから底へ縦方向に範削り調整をして



第7図 養老遺跡出土土器実測図と拓影

いる。これとよく似た器形のものは、鈴鹿市上箕田遺跡第1次調査の際出土しているが<sup>(1)</sup>、1回り大形である。2は推定高5cm、下腹部がやや張る球形の胴部をもち、底は上げ底。肩より胴中央に、櫛描列点文をはさんで櫛描横線文を上下に配している。第V様式のパレス・スタイル土器のミニチュアであろう。この手本になった壺形土器の破片として、33・35・36・38・39がある。いずれも赤褐色の明るい色調を帶び、肩の部分に櫛描きの文様をつけている。4は推定高20cm、胴長で平底である。巻き上げ成形のあと、指頭の押えによって調整した程度で、器壁内外面に凹凸が残る。6・8は口頸部のみだが、外反する口縁部をもち、8は口端で外へ伸びる。6の外面には、縦方向の範磨きがなされている。6・8は、第VI様式—欠山期—に属する土器かも知れない。

#### 高杯形土器(7・9・10)

7は、斜めにひろがる口縁をもち、稜を有し、杯部は浅い。脚部は、裾がひろがるもの(10)と、裾に面をもってあまりひろがらないもの(9)とがある。9は、柱状部分に範磨き横線文を2段に施し、円孔も裾にかけて2段3方に配する。下段のそれは2孔1対である。範磨き調整は脚部にしており、10によく残る。

#### 甕形土器(3・5・34・37)

逆八字形に単純に外反する甕形土器は、採集した範囲では見当らない。S字状の複合口縁をもつものである。3は5の口縁部をもつもので、推定高17cm、口端には5のように櫛描列点文をつけ、頸部より胴中央に櫛描文—横線文・列点文—を施す。他の器表面は刷毛目でおおい胴下部には煤が付着し、火熱を受けたようである。同様の甕形土器の破片に34・37がある。

#### (2) 古墳時代前期の土器

確実に前期に属すると考えられるのは、11~15・20・25で、16~19・22~24は弥生時代後期に属する土器かも知れない。

#### 壺形土期(15・16・18・19)

いずれも口縁部のみで、15は口径17cm、口縁に段をつけて複合口縁となり、口端は斜めにひろがる。16は、やや内彎気味の口縁部で、径11cm、作りは薄手である。器面は剥離して細部の調整は不明。底部は上げ底(19)もあり、平底(18)もある。

#### 高杯形土器(24・25)

杯部が欠け、脚部のみである。脚部裾は「八」字形にひろがり、端部は面をつくらず、丸くおさまるものである(25)。円孔を三方に配し、25は器表面を平滑に範磨きしている。

#### 甕形土器(11~14・17・20・21)

S字状の複合口縁をもつS字状口縁形土器(11~14・20・21)と口縁が単純に外反するもの(17)とがある。17は口縁部のみで、胎土に砂粒が混じる。口径12cm、赤褐色を呈し、器面に刷毛目がわずかに残る。S字状口縁形土器は、口頸部と脚台部のみで、口縁部の特徴は大參義一氏がb類とされたもののそれである。<sup>(2)</sup>11~14は口径こそ11~16cmと異同はあるが、細部の調整手法は全く

同様である。つまり、口縁は内外面を横になで、肩より下は斜行の刷毛目で仕上げ、その上を14のように横線を引く。脚台は八字形に外へ開き、脚端は内へ折り返されて20のように帯状部をつくる。脚台部上半より脚端にかけて範圧痕文で飾る場合が多い(20)。21は脚端内面に帯状部をもたず、さらに低い脚台をもつところが普通のS字状口縁形土器と違うところである。胴部を欠くが、他の例からして肩が張り、下半部は直線的に細まるのが通例である。なお胎土には全て砂粒が混じ、黒褐色を呈す。

### (3) 古墳時代後期以降の土器

点数は余り多くない。26~30が土師器で、31・32が須恵器である。26・27と31、28~30と32とが同時期の組合せになり、前者は古墳時代後期の早い時期に、後者は大雜把に奈良時代前期に比定できようか。

#### 土師器・甕形土器(28)

口頸部のみで長胴の甕か、それとも球形の胴部の甕かは不明である。口径約26cmで、口縁は内外面とも横になで、口端は引上げて立つ。肩より下は内外面とも刷毛目で調整している。他に口端が内に折り返されるような器形のものもあった。

#### 同・杯形土器(26・27)

内外面とも赤褐色を呈し、口縁部は内傾し、口端は内に面をつくる。口縁外面は、横なでによって少し押えられている。底部は丸底になる。口径12~13cm、器高5cmで、器面は剥離して、細かな調整は不明であるが、26には範削りのあとがあった。

#### 同・皿形土器(29・30)

いずれも底をかくが、口径16cm、器高3cmで赤褐色を呈す。内面から口縁部外面は横になで、底部にかけては範削りの調整をしている。

#### 須 恵 器(31・32)

いずれも杯で、31は口径11cm、器高5.5cm、立上りが直立し、体部が比較的浅い杯身で、須恵器でも古い時期—5世紀後半ごろ—の特徴をもつものである。内面より受部までは横なで、体部は範削り調整を施し、仕上げは丁寧である。32は口径12cm、器高4cmのもので、奈良時代前期—7世紀後半ごろ—に属するものであろう。底部を範削りし、他は横になでて調整をしている。

## 2. 森 山 遺 跡

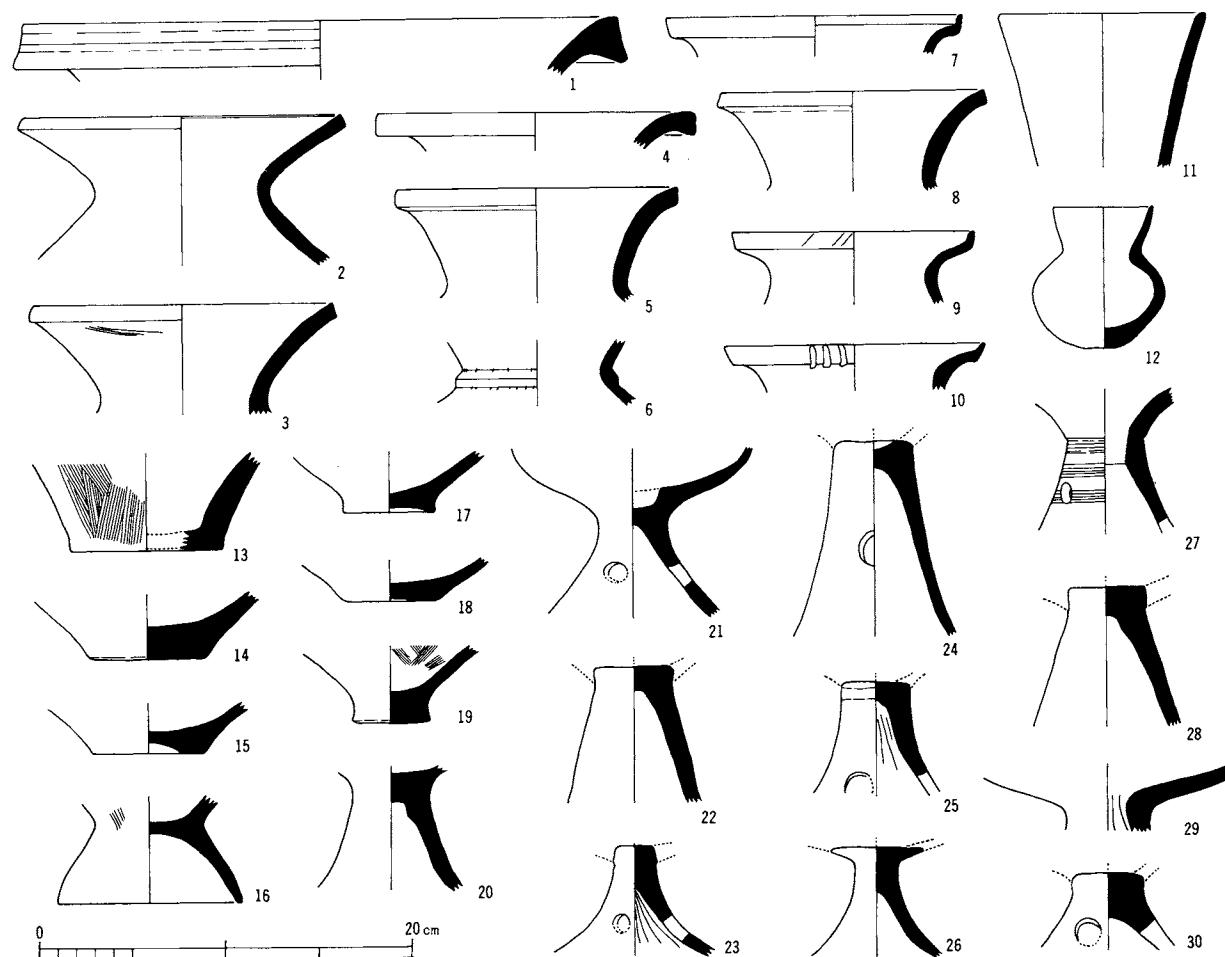
遺物は、石器1点と山茶碗片をのぞいて弥生式土器で、それも弥生時代末期の、伊勢湾地方第VI様式—三河地方でいう欠山期—に属するものがほとんどである。中に弥生時代前期の、伊勢湾地方第I様式のものも3片ほど混じていた。土器はすべて溝址及び土塙状遺構を覆う暗褐色土中より出土した。土中での土器の保存状態は極めて悪く、器面は剥離して、水洗もできない状態であった。したがって文様の残るものはまれであり、調整手法の観察できるものはほとんどない。

また大半が破片であり、完形品は12のみである。器形は、壺形土器・高杯形土器・器台形土器・甕形土器と一應揃っている。

### 壺 形 土 器 (1 ~ 6 · 8 · 10~15 · 17~19)

器形から広口壺形土器・小形壺形土器・長頸壺形土器に分けられる。

A、広口壺形土器 (1 ~ 6 · 8 · 10) すべて外反する口頸部のみであるが、口端が下に折り返されて幅広い端面を形ずくるもの(1)、端面はつくるが下に折り返されないもの (2 ~ 5 · 8) 、口縁に段を有して口端が立上り気味のもの(10)とがある。1は口径28cmと大形の壺であり、端面に凹線文の痕跡を残す。6も1と同様の口縁をもつものであろうが、頸部に断面三角形の突帯をつけ、櫛描列点文の跡をもつ。1 · 6はパレス・スタイル土器の系譜につながるものと考えてよい。2 ~ 5 · 8は幅1cmほどの端面をもち、第VI様式の壺形土器を代表するものである。なかでも2は「く」の字形に口頸部が屈曲して、その典型であろう。10は3本1組の棒状浮文を口端面に貼りつけている。



第8図 森山遺跡B区出土土器実測図 (1 : 4)

B、小形壺形土器(12) 唯一の完形品である。口径5cm、器高7.5cmで、口頸部と胴体部の比は3:4ほどである。口縁は直口となり、口頸部は外反するものの内彎気味である。底は小さく上げ底のよう。器面の剥離がひどく調整手法は不明。

C、長頸壺形土器(11) 口径11cm、口頸の現存の高さ8cmほどのものである。

なお、壺形土器の体部は、胴の張る球形のものであろうが、図示できるようなものは検出されなかった。底部は平底のもの(13・14)と上げ底のもの(15・17・18)とがある。19は底部が台状のようになったもので、どのような器形になるか不明である。

#### 高杯形土器(20~26・28・30)

ほとんどが脚部で、それも裾を欠く柱状部分がほとんどである。大形のもの(20・22・24・28)と小形のもの(23・26)とがある。小形のものほど裾の開き具合は大きい。大形の24は、第V様式の要素を色濃く残している。外反する裾に丸味をもつ典型的な第VI様式の高杯は見当らないが、25はその柱状部分かも知れない。脚部には円孔をもつものともたないものとがあるが、もつ場合、3孔が多いようである。21は椀形の杯部をもつものであるが、台付小形壺形土器かも知れない。

#### 器台形土器(27・29)

いずれも器受部下半より脚柱状部分にかけての破片のみで全形の知れるものはない。27は、柱状部分に櫛描横線文を三帯配し、円孔も二段三方につけている。29の内面には絞り目がある。

#### 甕形土器(7・9・16)

口縁部と脚台部のみ。口縁は段を有して立ち、9にはかすかに櫛描列点文の跡が残る。脚台は裾が「八」字形に開く。どれも胎土には砂粒が混じっている。

### 3. 桐山遺跡

弥生時代後期の土器より室町時代の羽釜に至るまで、土器の総量は多くないが、各時代各様のものがある。須恵器は少量あり、いずれも平安時代の新しい時期のものである。各様の土器は同じ層より多くは混在して出土した。中には、弥生時代後期のものが上層に、羽釜片が下層にと逆転して出土する場合もあった。

#### (1) 弥生時代後期の土器

##### 壺形土器(1~3)

「く」の字形に外反する口縁部のみで、1は口端が下に折り返されて端面が広くつくられ、内面には櫛描列点文の跡がかすかに残る。2・3は端面は狭く、3の頸部には突帶がついたようである。底部は上げ底(13・17)も、平底(15・16)もある。

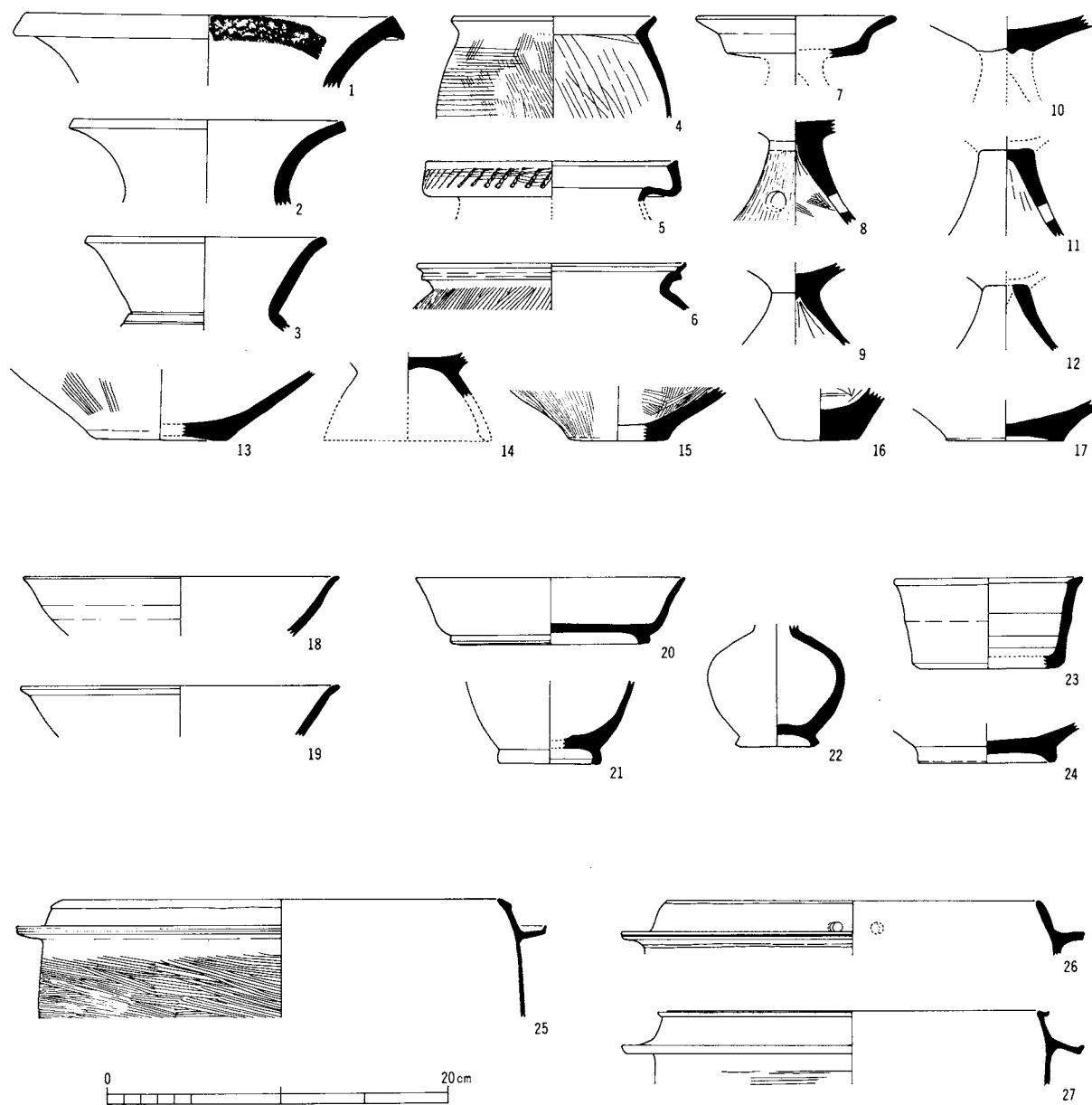
##### 高杯形土器(8~12)

いずれも小形高杯で、円孔をもつものともたないものがある。8は器面を箆磨きしている。

## 甕形土器(4・5)

「く」の字形に屈曲する短い口縁部をもつもの(4)と複合口縁をなして口端が内傾しながら立つもの(5)とがある。前者は、器面を一度横方向に刷毛目で調整し、その上を再度縦方向に調整・仕上げをし、内面は箒削りしている。煤が一部に付着し、火熱を受けたことをものがたる。後者は暗褐色を呈し、端面には箒先による押圧列点文が施されている。

1・5は伊勢湾地方V様式に属し、他はVI様式に属するかと考えられる。たゞ高杯形土器は小形品ばかりであり、つぎの古墳時代前期に属するものと見なすこともできよう。



第9図 桐山遺跡出土土器実測図(1:4)

## (2) 古墳時代前期の土器

### 高杯形土器(7)

杯部のみであるが、口縁部が屈曲して外へ開き、口径12cmと小形のもの。これとよく似た器形は、つぎの甕形土器とともに鳥羽市大畠遺跡<sup>(3)</sup>で多くに出土した。器台形土器としてもいいような器形である。

### 甕形土器(6・14)

口径16cmのS字状口縁をもつもので、器面には媒がつき2次的な火熱を受けている。脚台は14で裾をかくが、刷毛目のあとが屈曲部分に残る。

### (3) 歴史時代の土器

須恵器(18~22) 20は口径16cm、器高4cmの杯身。口縁部は内彎気味に反り、杯底部は直線的で丸味がない。横になでて調整している。18・19は口縁部のみで、口径16cmほどの椀。口端が少し返り、焼成は堅緻である。21・22は瓶の一種。ともに口頸部を欠くが、胴径より1回り口径が小さく、長目の感じの口頸部がつくと思われる。22は小形品で推定高10cmほどのもの、内面及び胴肩部は横になで、胴下半部は範削りしている。21も整形手法は同巧である。

20の杯身は、折戸10号窯式のそれによく類似しており、出土須恵器は平安時代初期の頃のものと考えて大過なかろう。

山茶椀(24) 底部のみで、高台は断面三角形を呈し、底には糸切りの跡が残り、胎土には砂粒を含む。

23は底部を欠く椀。内外面に水引きの跡がよく残り、口縁内面及び体部外面は施釉され、薄い黄緑色を呈する。体部から底部に移行する部分は範削りされて、生地のまゝである。いつごろのものか判断がつかない。

土師器(25~27) すべて口縁部のみの羽釜である。25は口径26cm、26・27は口径22cmを計る。それぞれ、口端及び鐸の部分に違いが見られる。器壁は薄く、2~3mmほど、26には2孔1対の円孔が2方につく。なお、鐸の側面及び下面には黒々と煤が付着している。中世の遺物には違はないが、いつの時期のものか不明である。

(1) 仲見秀雄「上箕田」神戸高等学校郷土史クラブ

(2) 大參義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』

(3) 下村登良男「おばたけ遺跡発掘調査報告」鳥羽市教育委員会

(4) 樽崎彰一「猿投窯」

# V 結 語

これまで、遺跡の状態について詳細に述べてきた。ここでは各遺跡ごとに主な事項を列記し、最後に私見を述べて結語としたい。

## 1. 養老遺跡

- (1) 安濃川の形成する自然堤防の裾、標高7m未満の水田下にある。
- (2) 北西—南東方向に遺物包含層を40mほど確認したのみで、全体の規模は不明である。
- (3) 遺物包含層は2層で、弥生時代後期より奈良時代前期までの土器が出土するが、量的には多いのは弥生時代後期及び古墳時代前期土師器である。
- (4) 弥生時代後期土器は、伊勢湾地方第V様式に属するもので、その様式の土器が使用された時期に本遺跡が形成されたと考えられる。
- (5) 各時代の土器を出すといつても、第VI様式に続く第VII様式—欠山期—の弥生式土器、さらには古墳時代前期土師器に続く古墳時代中期に相当する土師器をかくことから、連綿として形成された遺跡ではない。
- (6) 当時の安濃川の河道は一定せず、たえず氾濫を繰り返していたと考えられる。遺跡を形成した人々は、ために安全な微高地に居を定めては移ることを余儀なくされていたに違いない。このようなことを、(5)の事実の背後に読みとれる気がする。

## 2. 森山遺跡B区

- (1) 遺構とおぼしきものは第3紀安芸層の地山面にある。
- (2) 溝状土塙は人為的なものかどうか判断に苦しむところで、確実な遺構はSD1の溝址しかない。
- (3) 出土遺物は、伊勢湾地方第VI様式の弥生式土器がほとんどある。前年度調査のA区も第VI様式土器が弧状溝址より出土している。このことより、森山遺跡は弥生時代後期末に形成されたものといえる。
- (4) 森山は、かつてはゆるやかにもっと南西方向に張り出していたことは、水田の地割りから推察できる。しかし、A区の弧状溝址はそれでも丘陵の端部にあり、そしてB区からも住居址は検出されなかった事実から、当時の人は森山に居を構えることはなかったと思われる。
- (5) A区とともに同じ年に発見された森山東遺跡では、竪穴住居址らしいものの断面が排水路壁面に確認されている<sup>(1)</sup>。そして、出土土器も森山遺跡のそれと同時期のものである。したがって

森山遺跡を形成した人たちの居住地は、すぐ隣りの森山東遺跡にあったと考えてよかろう。

### 3. 桐山遺跡

- (1) 発掘区壁面にみる砂層及び砂質土の落ち込みは、旧河道と考えられる。
- (2) 遺物は旧河道に堆積した粘質土及び砂質粘土層に包含されている。
- (3) 同じ層位より弥生時代後期土器と歴史時代に属する土器とが出土した。
- (4) 出土土器は、すべてに器面が擦れしており、(3)の事実と併せて、もともとあったものでなく、他から運ばれ旧河道に埋没堆積したものと考えられる。

以上報告してきた3遺跡はともに弥生時代後期の土器を出すことで共通する。3遺跡だけでなく、安濃川左岸の氾濫平野に点在する遺跡の大部分は弥生時代後期に形成されたことが、圃場整備事業の進行とともに判ってきた。竹川遺跡・松ノ木遺跡・森山東遺跡がそうである。今のところ、弥生時代前期・中期の土器を出す遺跡は、氾濫平野で納所遺跡が知られるのみである。しかも納所遺跡は前期から後期、さらには古墳時代前期に至るまで続く大遺跡である。したがって安濃川左岸の氾濫平野の開拓が一段と進む時期は弥生時代後期であり、納所遺跡からの分村という形がとられたのではなかろうか。また弥生後期に続く古墳時代前期土器の様相も竹川遺跡で明らかになりつつある。しかし、古墳時代後期の須恵器及び土師器の出土は、養老遺跡のように断片的で、まとまった出土例を見ない。今後、このことも含めて安濃川流域の埋れた歴史を解明していくなければならない。

- (1) A区の緊急調査の際確認



# (付)津市渋見町「竹川遺跡」緊急調査報告

——昭和45年2月——

昭和45年1月、津市遺跡分布調査員が津市渋見町竹川地内の踏査を行なっていた。付近は「竹川遺跡」（県遺跡番号、1353）として、古くより知られている地域である。ところがその地区で県農林水産部による美濃屋川改修事業が行なわれており、ブルトーザーによる削平面には多数の土器が散乱していた、早速同氏によって津市教育委員会に連絡され、更に県教育委員会に通報があった。県教育委員会は県農林水産部と協議をもち、直ちに工事は一旦中止された。協議を重ねる間、新聞紙上にも掲載され、教育委員会と開発機関との連絡不徹底がきびしく指摘された。協議の結果、既に河川敷は破壊されており、更に事業の公共性も考慮し、昭和45年2月3日より3日間津市教育委員会が主体となり調査を行なうことになった。

竹川遺跡は津市の市街地の西北方2km、安濃川とその支流美濃屋川に形成された沖積地に存在する。美濃屋川はこの沖積地の北沿い、偕楽公園につづく丘陵の裾を流れる。遺跡はこの川を狭んで80×100m程度の規模をもつ。調査は僅か3日間であり、河川敷は既に破壊されており、その周囲の遺物採集という状態であった。採集した遺物はリンゴ箱10数個におよぶ。その殆んどが土器片である。その際の知見によれば層位は表土層は既に攪乱されており、第Ⅱ層—黄褐色粘質土、第Ⅲ層—暗褐色粘質土、第Ⅳ層—青灰色砂質土、第Ⅴ層—白色砂質土となる。しかし、遺物と層位の関係は明瞭にし得なかった。

## (1) 弥生時代後期前半の土器（第1図）

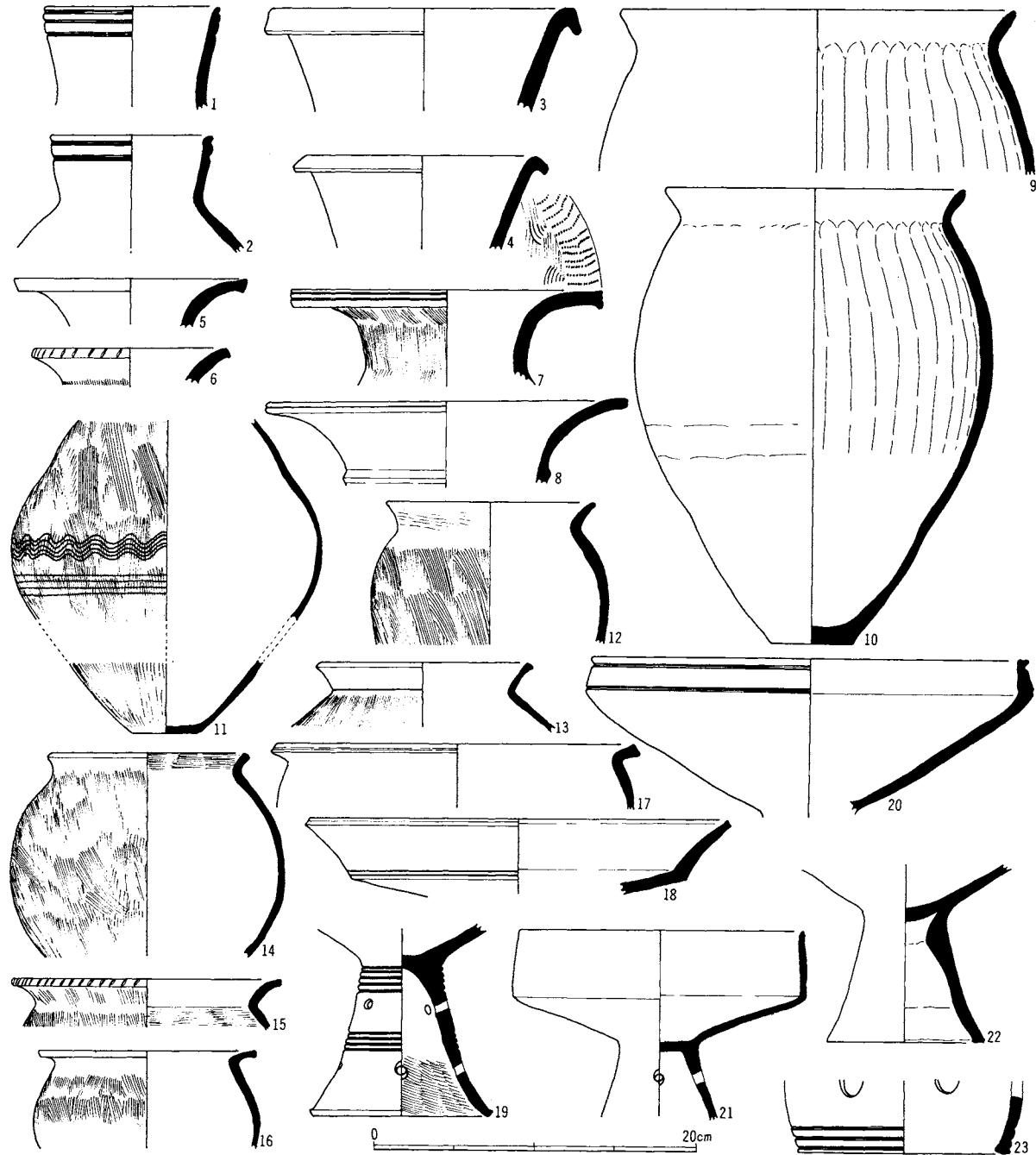
比較的厚手で、淡褐色、灰色を呈し、砂粒を多く含むものと、薄手で黒褐色を呈し、前者に比べもらい土器とがある。器種には壺形土器、甕形土器、高杯形土器がある。

### ○壺形土器(1~8)

直立する口縁部に凹線文のめぐるもの（1・2）、厚手で外方に開き折り返し状の口唇部を有するもの（3・4）、口縁部が大きく外反し、口唇端部に沈線のめぐるもの（5~8）がある。6の口縁内側には櫛状工具による刺突および扇形文が見られる。

### ○甕形土器(9~17)

厚手で、表面は平滑に仕上げられ、内面には指による調整の痕の見られるもの（9・10）と、表面には全面刷毛目の施されるもの（11~15）がある。11は胴部が大きく張り出すもので、中央部に櫛描きの波状文、沈線が見られる。16・17は口縁部の外反が直角に近くなるもので、17は9・10同様に表面は平滑に仕上げられている。



第1図 弥生時代後期前半の土器(1/4)

○高杯形土器(18・19)

18は口縁部が大きく外反する浅い杯部分である。口唇部がつまみあげられたようになり、杯下部の稜部分には沈線がめぐる。19はやや深い杯部につくと思われる脚部分である。2段の櫛目、透孔が交互に見られる。

なお、20～23は中期に遡る高杯形土器、台付無頸壺形土器である。いずれも畿内的な色彩の強いものである。

以上の土器の多くは東海地方の編年では寄道式土器に比定される。しかし、一部は最初、中期に遡るものではないかと考えた。それは（1～4・9・10）等の厚手で、表面を平滑に仕上げられた土器であり、従来の当地域のこの時期には見られない器形および仕上がりである。中期に遡るとした20～23と焼成、胎土が似ており、中期からこの期にかけて、機械的な要素が少なからず伝播してきているのであろうか。

## (2) 弥生時代後期中葉の土器（第2図）

### ○壺形土器（1～5）

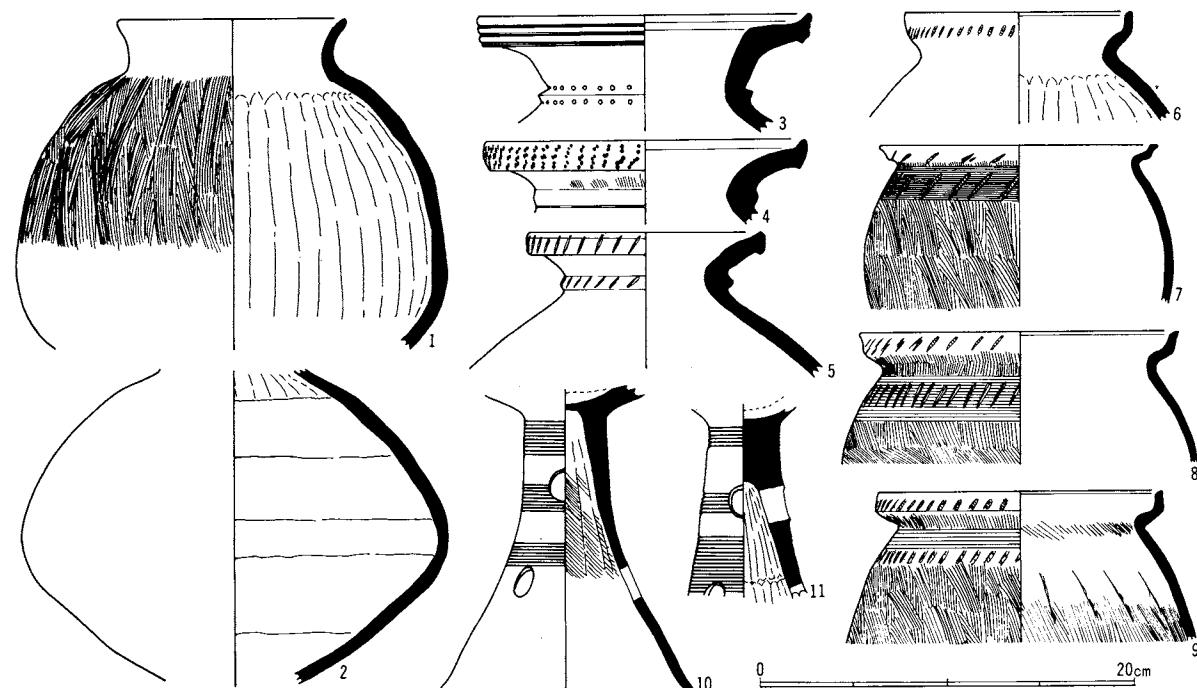
薄手で素縁の口縁部を有するもの（1・2）と、厚手で口縁部に装飾を有するもの（3～5）がある。1は胴上半部には刷毛目が、内面には指による調整のあとが見られるが、2は全面平滑に仕上げられている。後者はいずれも、口唇部に櫛状工具による平行沈線、刺突、刻目がみられ頸部には凸帯がめぐる。

### ○甕形土器（6～9）

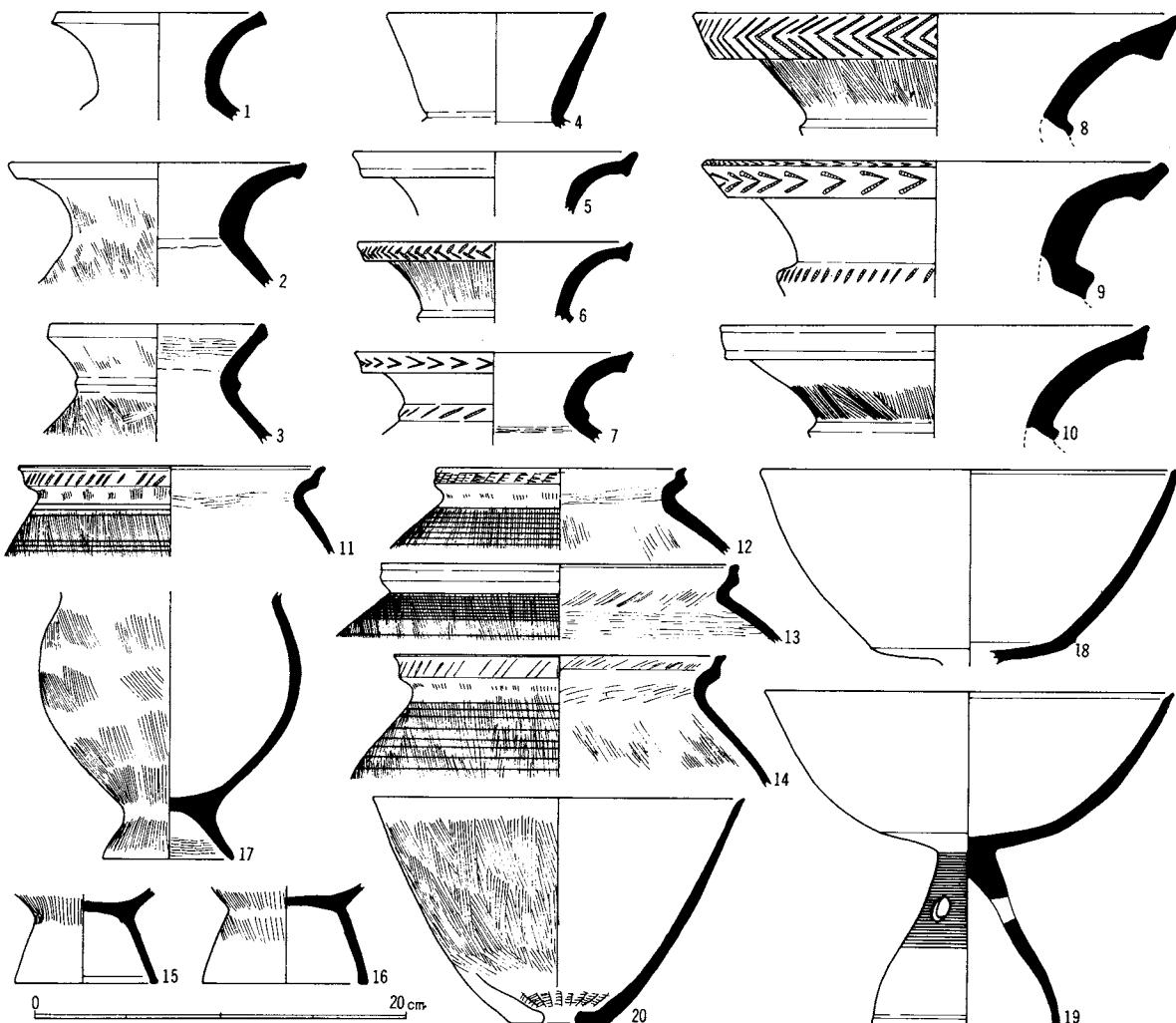
いずれも口縁部が直立する受口状を呈する薄手の土器である。6を除いて、刷毛目のあと、口縁部に櫛状の刺突、刻目が見られる。肩部分にも平行沈線のあと、口縁部同様の刺突、刻目が施される。

### ○高杯形土器（10・11）

脚部のみである。真直ぐに外方に開くもので、三段の櫛描横線がめぐり、透孔は上段に一孔、下段に3孔があけられている。表面は全面ヘラ研磨されている。



第2図 弥生時代後期中葉の土器(1/4)



第3図 弥生時代後期末の土器(1/4)

### (3) 弥生時代後期末の土器（第3図）

#### ○ 壺形土器（1～10）

口縁部に稜を有する素縁のもの（1～4）と、折り返し状の複合口縁となるもの（5～10）がある。後者には口径15cm以下の小形品と、30cm以上の大形品とがある。櫛状工具による装飾は前の時期のものとはや、異なり、矢羽状を呈するものが多くなる。なお、4は長頸壺であろう。

#### ○ 薺形土器（11～17）

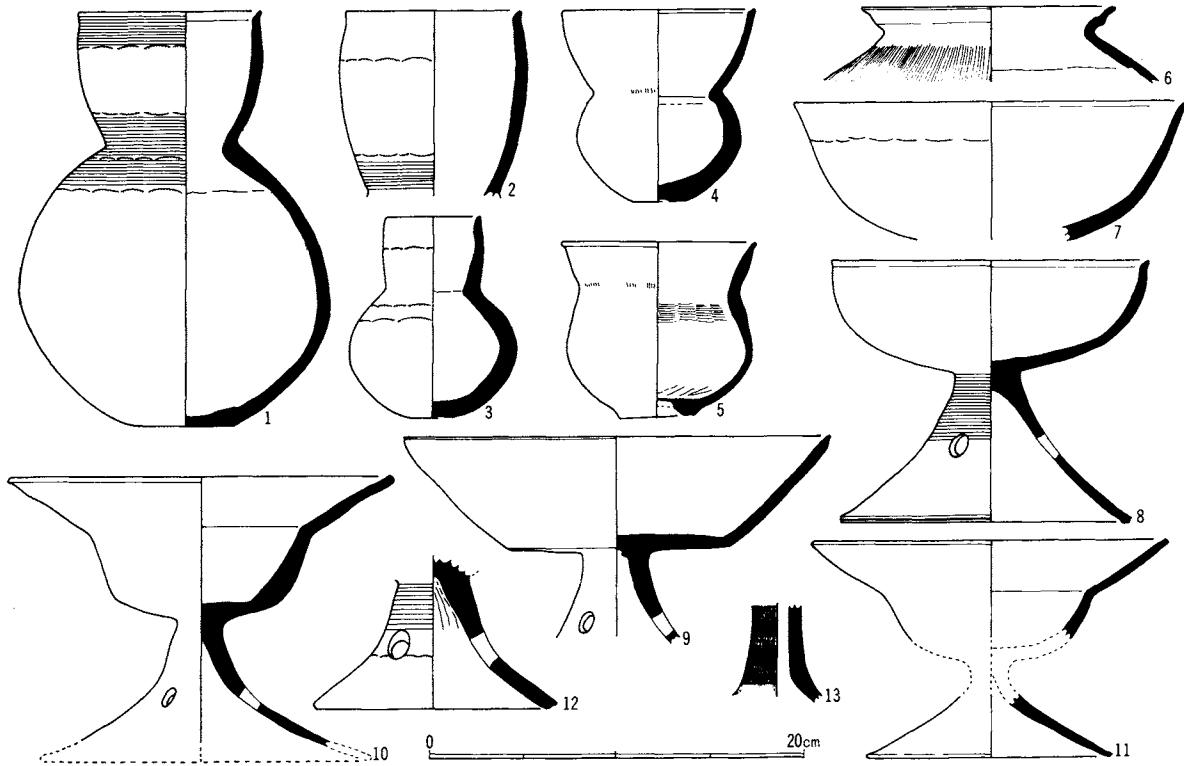
所謂、S字状口縁を呈するものであり、いずれも薄手に仕上げられている。全面に刷毛目が施され、灰色を呈する。口縁部には刺突が、肩部には粗い横線がめぐる。

#### ○ 高杯形土器（18・19）

深くて、大きい杯部分と、細くしまる接合部より、や、内巻気味に開く脚部よりなる。杯底部は小さく、稜を有する。脚上半部には櫛目がめぐり、3孔が穿たれている。全面ヘラ研磨された堅徴な土器である。

#### ○ 瓢形土器（20）

真直ぐ外方に開く鉢形を呈する。厚手で、全面に刷毛目が施されている。



第4図 古墳時代の土器(1/4)

#### (4) 古墳時代の土器（第4図）

##### ○壺形土器（1～4）

1～3は同器形で、内弯気味に立ちあがるや、長い口縁部と球形の胴部よりなる。口唇部のみ僅かに反る。口縁部、肩部に平行沈線および弧状の鋭い刺突がめぐる。この刺突は高杯形土器（7・12）にも見られる。全面ヘラ研磨されている。4は大きく外方に開く口縁部に、小さな胴部がつくものである。

##### ○鉢形土器（5）

赤褐色を呈する薄手の土器で、ゆるく外反する口縁部が僅かに肥厚する。刷毛目が一部見られる。

##### ○甕形土器（6）

S字状口縁の甕形土器である。口縁部が短かくなり、刺突、肩部の横線はなくなり、縦方向の刷毛目のみになる。

##### ○高杯形土器（7～13）

杯部が半球形を呈するもの（7・8）と、真直ぐ外方に開く口縁部に平坦な杯底部となるもの（9）、および口縁部が一旦外反し、球形の杯底部となるもの（10・11）がある。脚部は前時期の6にくらべ短かく、裾の開き方も大きくなる。13は小形の脚部で横線および円形刺突、爪形刺突が施され、朱塗されている。

竹川遺跡からは僅か3日間の調査であったが、弥生時代後半より古墳時代にかけての多数の土器が採集された。以前、伊勢湾西岸に於ける弥生時代後期の編年を、上箕田→西ヶ広→高松と述べたことがある。当遺跡の弥生後期の土器群もそれに相当するようである。そして、前述の如く後期初頭には幾内的な色彩が少なからず見られる。このことは鈴鹿市上箕田遺跡についてもいえそうである。又、当遺跡からは中期末と考えられる数点の土器が出土している。従来、当地域に於ける中期後半の土器については明瞭ではない。それは中期前半では朝日式、貝田町式といった東海地方の土器群がそのまま見られるのに対し、中期後半の長床式、高蔵式と呼称される一群は明確にし得ない。僅かに上箕田遺跡、<sup>①</sup>上村遺跡等から凹線文を主体とする高杯形土器、壺形土器等を指摘し得るのみである。中期後半の様相の把握が問題であろう。

古墳時代とした土器については、その殆んどが古式土師器と呼称される一群に相当する。古式土師器のメルクマールとされる小形丸底壺や小形器台は見当らないが、鳥羽市大畠遺跡SKI出土<sup>②</sup>の土器群に似ている。

古く、津市半田高松遺跡の報文に於いて、安濃川流域の遺跡には沖積地に立地するものと、丘陵上に位置するものとに大別されると指摘されたことがある。<sup>③</sup>その後も安濃川流域からは弥生時代の遺跡は相当数見付っている。本書に記載されている養老、<sup>④</sup>森山遺跡をはじめ大ヶ瀬遺跡、<sup>⑤</sup>高松弥生墳墓等である。遺跡の立地の相違が何によるものか明確にし得ない。たゞ沖積地の遺跡に於いても、現状では水田下1m以上の個所より出土する場合と、畑や宅地に利用されている微高地上より出土する場合とに区分される。分布とともに沖積地の層位による検討も必要であろう。

<sup>⑥</sup>  
(山田友好・谷本鋭次)

① 吉村利男「上村遺跡発掘調査報告」津市教育委員会 1972

② 下村登良男・村上喜雄「おばたけ遺跡発掘調査報告」鳥羽市教育委員会 1972

③ 三重大学歴史研究会原始古代史部会「津市高松弥生遺跡について」古代学研究37. 1964

④ 昭和45年、三重大学歴史研究会原始古代史部会調査

⑤ 谷本鋭次「高松弥生墳墓発掘調査報告」津市教育委員会 1970

⑥ 当遺跡の発見後、遺物の整理、土器実測については元三重大学生山田が中心になって行った。山田は卒業論文も弥生時代後期を中心にしており、この山田の論文をもとに山田と谷本が共同して報告することになった。



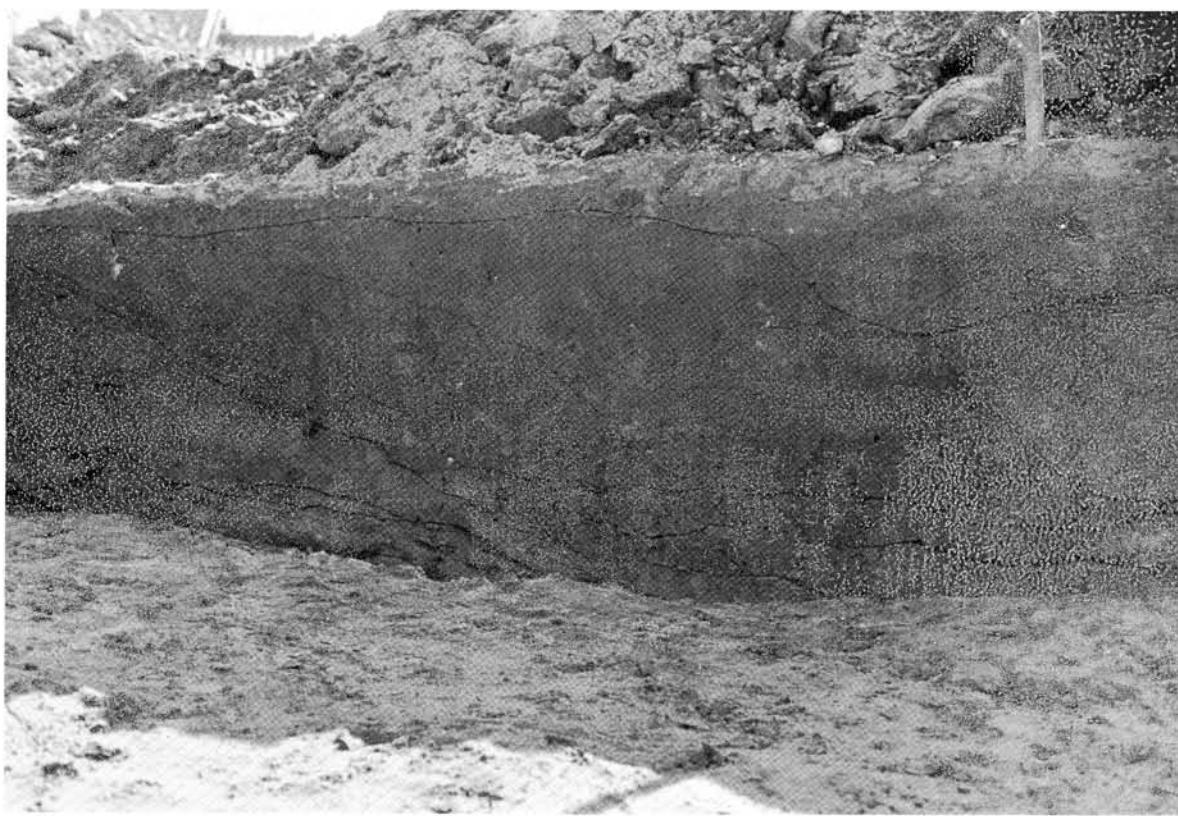
遺跡遠景（西上空より） 1 養老遺跡、4 竹川遺跡



遺跡遠景（南上空より） 2 森山遺跡B区 3 桐山遺跡



桐山遺跡発掘区全景（北より）



桐山遺跡発掘区南壁断面



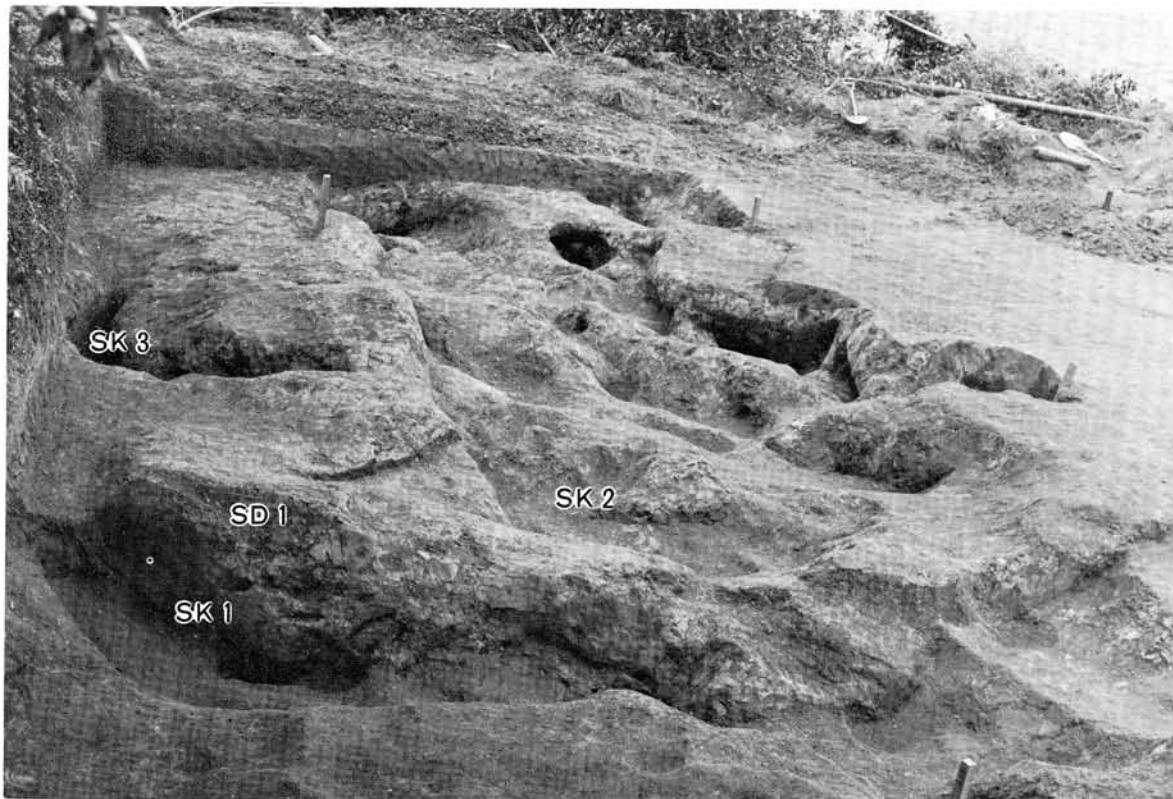
費老遺跡排水溝壁面



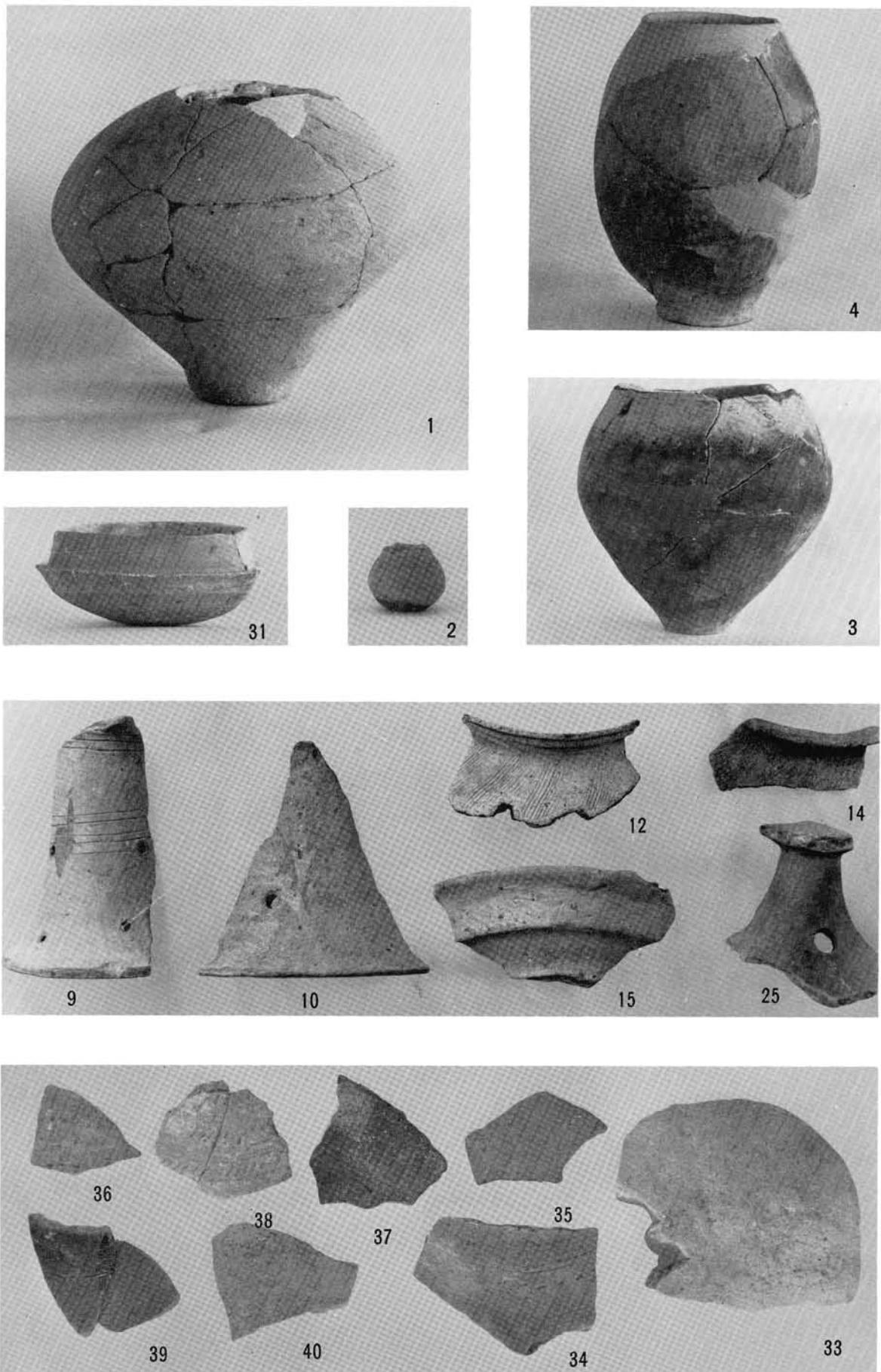
発掘前の森山遺跡B区全景（南より）



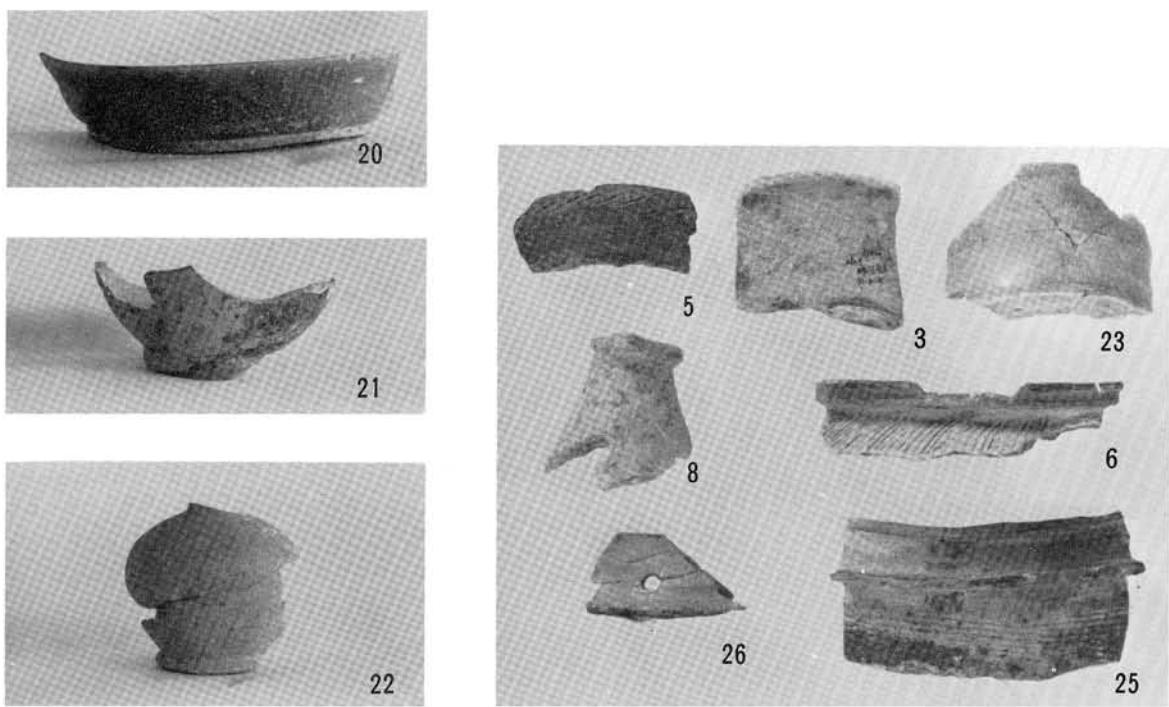
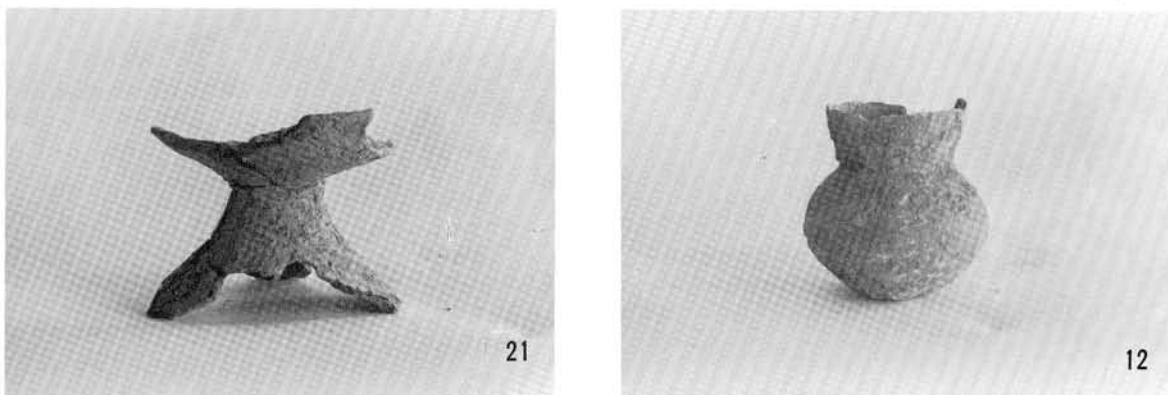
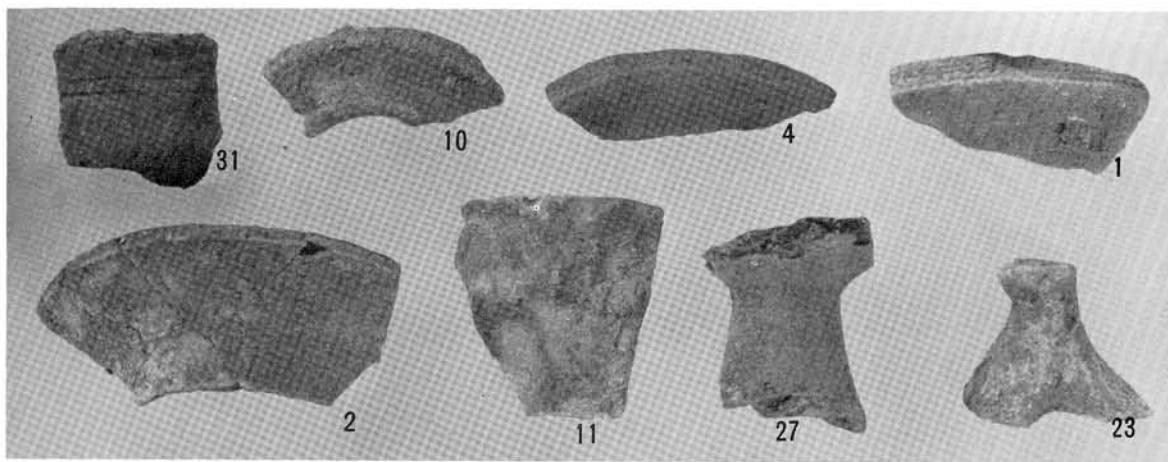
発掘後の森山遺跡 B 区全景（南より）



森山遺跡 B 区東半部



養老遺跡出土土器 (1 : 3)



上段：森山遺跡B区出土土器、下段；桐山遺跡出土土器（1：3）



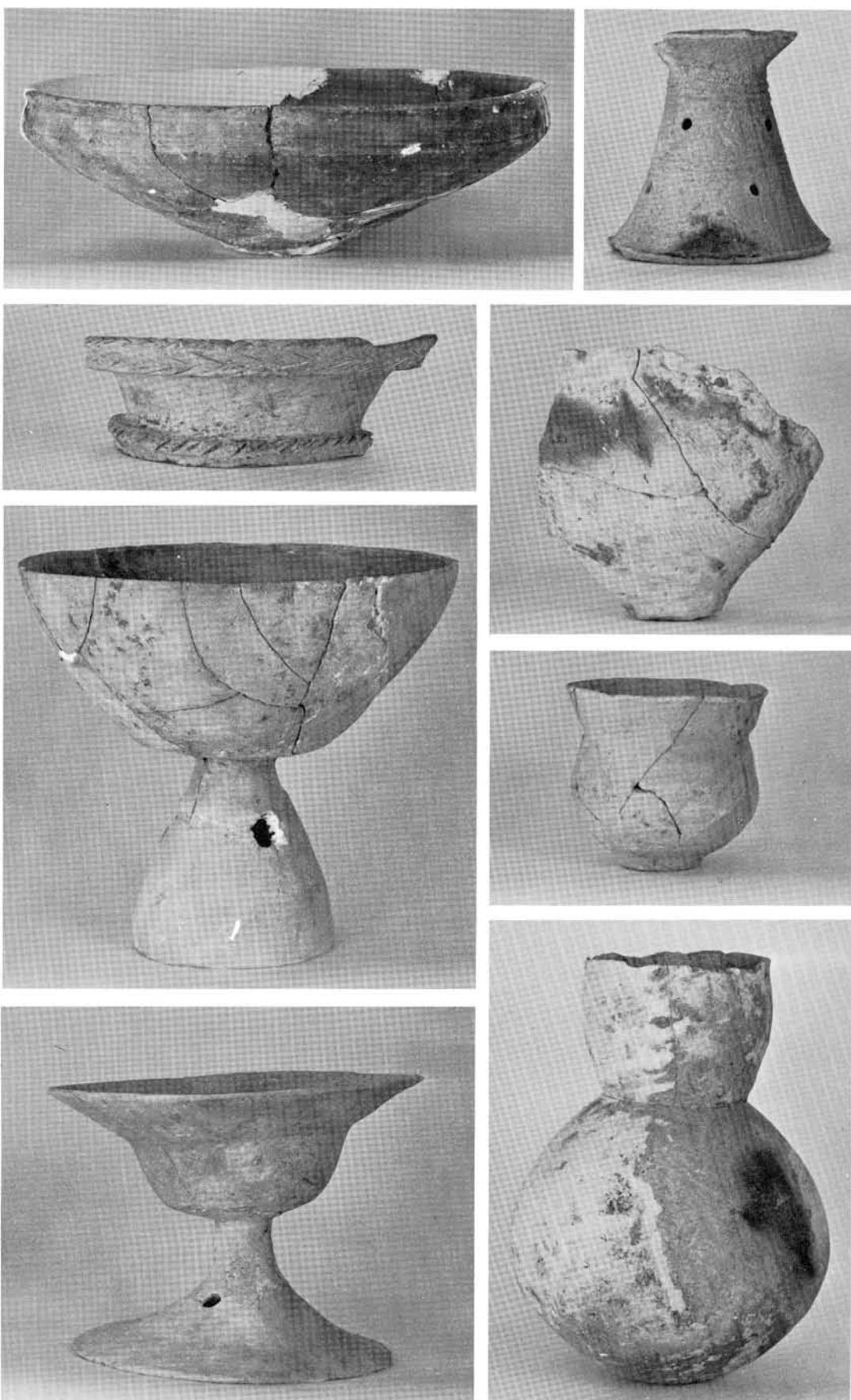
遺跡遠景



発掘状況



遺 物



遺 物

昭和47（1972）年3月に刊行されたものをもとに  
平成16（2004）年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財報告 13

養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告

1972年3月31日

編集 三重県教育委員会

発行 三重県教育委員会

印刷 津市栄町2丁目  
東亜印刷有限会社